

第41回日本創傷治癒学会を開催して

藤田保健衛生大学医学部形成外科学 吉村 陽子

この度第41回日本創傷治癒学会を、2011年12月5日、6日の両日、名古屋駅前の愛知県産業労働センター（ウインクあいち）で開催させていただきました。おかげさまで、医師116名、コメディカル101名、企業関係者50名のご参加をいただき、盛会裏に終始することができました。主題演題として、1)「慢性創傷の治癒促進」、2)「組織再生のための新知見」、3)「手術創の治癒促進」、4)「創傷治癒を助ける看護」、5)「機能再建のための新知見」の5つを用意して演題募集を行ったのですが、5)に関してはご応募が1題しかなく、応募演題の多かった2)を2つに分ける形で配分させていただきました。その結果、主題演題27題、一般演題40題を初日5つのセッション、第2日目は8つのセッションに分けてご発表いただきました。その他に特別講演2題、ランチョンセミナー2題、アフタヌーンセミナー1題(2演者)を組み、ランチョンから始まる一日半の日程としては、かなりタイトなスケジュールになりました。座長の先生方にはかなりご無理を強いることになったのですが、活発なご討論をいただき、実りのある学会になったと自負しております。ご協力ありがとうございました。

本会のテーマとしては、「scarless healingに迫る再生医学」を掲げました。「再生医療」でなく「再生医学」としたのは、基礎的研究が実際の臨床に持ち込まれるためには、まだまだ越えなければならない壁が高いと感じているからです。学会を通じて、基礎研究が臨床に反映されるためのブレイクスルーに迫りたいというのが、今回のテーマの主眼でした。そのため、本来スポンサーにお任せするべきであったセミナーのテーマや演者まで、私の希望で決めさせていただいたため、セミナーのスポンサーをお願いした会社の担当各位には、大変ご迷惑をおかけしてしまいました。なかでも、アフタヌーンセミナーのテーマとした「培養軟骨による耳介再建」は、本来なら薬剤や機械に頼るものではないため、企業にとっては全くメリットのない内容であったにもかかわらず、ご協力くださったメディカルユースアンドエイさんには、本当に感謝しています。耳介再建などは形成外科以外の会員にとって興味のない問題で、参加者が少ないのではないかと危惧していたのですが、演者の矢永先生、今井先生のご研究の経緯と臨床における現状がわかりやすく紹介され、研究と臨床の懸け橋と言う部分で、とても参考になり、聴衆からも興味深かったという反応が聞かれ、ほっといたしました。



**NEWS
LETTER**

日本創傷治癒学会

**2012.2
No.67**

●日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel.03-3351-4774

fax.03-3355-4707

e-mail: info@jswh.com

URL: <http://www.jswh.com>

特別講演には、免疫寛容の大きさから、臨床への応用が期待される羊膜による組織再生について、国立成育医療研究センター副所長の梅澤明弘先生と、実際に羊膜を臨床応用しておられる藤田保健衛生大学第二教育病院眼科教授の平野耕治先生にご講演をお願いしました。梅澤先生からは共同研究者として私の夫である慶應義塾大学産婦人科教授吉村泰典の名前をたくさん引用していただき、最後に私たち夫婦の写真まで出していただき、顔から火が出る思いでした。一方、眼科のお話は本学会ではほとんど聞くことがなかったため、新鮮な内容だったと思います。

また、今回は看護協会のHPにも学会のご案内をリンクさせていただき、本学会理事の真田弘美先生のご尽力のおかげもあり、コメディカルの参加が多かったのが印象的でした。真田先生からは、WOCナースの勉強になる学会だというご評価をいただきました。コメディカルを含め、創傷治癒、創傷管理に携わる医療従事者にとって、有意義な学会であったならば、幸甚に存じます。関係各位のご協力に改めて御礼申し上げます。

第41回日本創傷治癒学会 学会賞・研究奨励賞受賞者

【学会賞】 該当者なし

【研究奨励賞】 1名

小川 令（日本医科大学形成外科）

『ケロイドの一塩基多型(SNPs)解析—ケロイドのオーダーメイド医療・体質診断法の確立へ向けて—』

第42回日本創傷治癒学会のお知らせ

■大会長： 小野一郎（札幌医科大学医学部皮膚科准教授）

■会 期： 2012年（平成24年）12月2日～4日

■会 場： かでる2.7（北海道立道民活動センター）

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目

TEL 011-204-5100(ダイヤルイン)

■学会事務局

札幌医科大学医学部皮膚科学講座 〒060-0061 札幌市中央区南1条西16丁目

TEL 011-611-2111(3455) FAX 011-613-3739

Email ichiro@sapmed.ac.jp

URL <http://www.ec-pro.co.jp/42jswh/>

■運営事務局

株式会社イベント・コンベンション・プロ(担当：久松伸一)

〒001-0000 札幌市北区北7条西4丁目8-3 北口ヨシヤビル7F

TEL 011-299-5910 FAX 011-299-5911

Email 42jswh@ec-pro.co.jp

腹痛、腹部膨満感に

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

ダイ ケン チュウ トウ
ツムラ大建中湯
エキス顆粒(医療用) 薬師基準収載



- 慢性便秘症患者、過敏性腸症候群便秘優位型などの腹痛、腹部膨満感に効果があります。^{1)~4)}
- 米国における無作為化二重盲検試験(健康人)にて、大腸輸送能の有意な促進効果が確認されました。⁵⁾
- 次の3つの機序による腸管運動亢進作用を示します。
 - 1)セロトニン3型、4型受容体を介するアセチルコリン遊離促進(*in vitro*、ラット、イヌ)^{6)~8)}
 - 2)消化管運動亢進ホルモンであるモチリンの分泌促進⁹⁾
 - 3)腸管粘膜層におけるパニロイド受容体を介した作用(*in vitro*)^{10) 11)}
- 腸管(小腸、大腸)血流量を増加させます。(ラット)^{12) 13)}
- 副作用は、間質性肺炎、肝機能障害、黄疸などです。

効能又は効果

腹が冷えて痛み、腹部膨満感のあるもの

用法及び用量

通常、成人1日15.0gを2~3回に分割し、食前又は食間に経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。

使用上の注意(全文記載)

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) 肝機能障害のある患者[肝機能障害が悪化するおそれがある。] 2. 重要な基本的注意 (1)本剤の使用にあたっては、患者の証(体質・症状)を考慮して投与すること。なお、経過を十分に観察し、症状・所見の改善が認められない場合には、継続投与を避けること。(2)他の漢方製剤等を併用する場合は、含有生薬の重複に注意すること。 3. 副作用 本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していないため、発現頻度は不明である。(1)重大な副作用 1)間質性肺炎:咳嗽、呼吸困難、発熱、肺音の異常等があらわれた場合には、本剤の投与を中止し、速やかに胸部X線、胸部CT等の検査を実施するとともに副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。 2)肝機能障害、黄疸:AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

頻度不明	
過敏症 ^{注1)}	発疹、蕁麻疹等
消化器	胃部不快感、悪心、嘔吐、腹痛、下痢等

注1)このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。

4. 高齢者への投与 一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。 5. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与 妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。 6. 小児等への投与 小児等に対する安全性は確立していない。[使用経験が少ない]

*その他の詳細につきましては製品添付文書をご覧ください。

- 【文献】 1)Horiuchi, A. et al. Gastroenterol. Res. 2010, 3(4), p.151. 2)尾高健夫ほか、消化器の臨床. 2000, 3(3), p. 338. 3)尾高健夫、漢方医学. 2008, 32(3), p. 207. 4)日沖其生、和漢医薬学雑誌. 1994, 11(4), p. 310. 5)Manabe, N. et al. Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2010, 298, p.G970. 6)Shibata, C. et al. Surgery. 1999, 126(5), p. 918. 7)Fukuda, H. et al. J Surg Res. 2006, 131(2), p. 290. 8)Satoh, K. et al. Dig Dis Sci. 2001, 46(2), p. 250. 9)Nagano, T. et al. Bio Pharm Bull. 1999, 22(10), p. 1131. 10)中村智徳、MEDICAL TRIBUNE. 2003, 36(22), p. 33. 11)Satoh, K. et al. Jpn J Pharmacol. 2001, 86(1), p. 32. 12)Murata, P. et al. Life Sci. 2002, 70, p. 2061. 13)Kono, T. et al. J Surg Res. 2008, 150, p. 78.



株式会社ツムラ

<http://www.tsumura.co.jp/>

●資料請求・お問い合わせは弊社MR、またはお客様相談窓口まで。Tel.0120-329-970

(2012年1月制作)

■使用上の注意等の改訂には十分ご留意下さい。 KO-1001 ㊞